

# 不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

## 「十(つなし)の庭」の機知

本号がお手元に届く頃、京都の各寺院ではお釈迦様の入滅にあわせ涅槃会が行われます。いずれもこの時期にだけ公開される各寺自慢の涅槃絵を拜見できる貴重な機会ですが、今回は上京区の本法寺をご紹介します。

叡昌山と号する日蓮宗の本山で、浴中二十一ヶ本山の一つに数えられ勢威を誇りました。開山



「十の庭」 右に五個、左に四個の石が配される。

は日親上人。恐怖の魔王、足利六代將軍義教に焼け爛れた灼熱の鍋を被せられて棄教を迫られながらお題目をやめず「鍋被り日親」と称された気骨の人です。またここは有名な本阿弥光悦を始めとする本阿弥一族の菩提寺であり、江戸幕府の将棋所となった初代大橋宗桂のお墓もあります。

この寺の講堂の南側に「十(つなし)の庭」と名付けられた小さなお庭があります。左右に分かれており、西側に五つ、東側に四つの石が置かれています。「十」と書いて「つなし」と読む。理由わかりますか？

ちなみに「一、二、三……」を「ひとつ、ふたつ、みつつ……」と数えてみて下さい。「十」だけは「とお」で「とおつ」ではありませんね。だから十は「つ」がない「つ無し」の庭というわけです。これだけでも機知に富んだ命名ですが、肝心の石が左右九つしかありません。十番



「三巴の庭」 石と蓮で「日蓮」を表わす。

目の石は見る人の心の中にある、というわけ。なんとも洒落た仕掛けではありませんか。

また書院の

前庭「三巴の

庭」は光悦の作

で、庭の中央に

半円型の石が

二枚並べられ、

少し離れて蓮

の花壇が置か

れています。石



長谷川等伯筆 仏涅槃図 重要文化財

が「日」の形を表し、蓮の花と合わせ「日蓮」を意味する、これまた見事な趣向です。

このお寺は茶道裏千家今日庵の西向かいにあり、境内の建物も寺宝も本当に見所満載の寺院ですが、特に大涅槃絵は等伯六十一歳の作で、二十六歳で急逝した息子・久蔵の菩提を弔うため精魂込めて描き上げたもの。通常は描かれない猫や珍しいコリー犬も描かれており、この時期だけ等伯の真筆が掛けられる必見の大作なのです。

(同志社大学嘱託講師 堤勇二)

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。京都を知ることには日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都  
検定

京都観光文化検定試験  
京都商工会議所